



探究学習 伴走する教師たち

高知県立
山田高校
濱崎麻衣



仲間との協働、失敗の昇華……。 人生を探究し続けるための 大切な経験に生徒と向き合う

探究学習の概要

外部と連携しながら 1年次から実践的な学びを経験

「探究する学校」を標榜し、普通科、グローバル探究科、ビジネス探究科の3科で、地域に根差した探究学習を3年間を通して展開する高知県立山田高校。濱崎麻衣先生は、高知県立大学や高知工科大学などの隣の大学や研究機関の支援を受けながら、地域が抱える課題、そして生活の中で抱いた様々な興味・関心を、教科の枠にとらわれないことなく、学術的な視点で深めている。

1年次は、探究の型を学ぶ「探究リテラシー（2単位）」を履修し、夏季休業までに8コマの「ミニ探究」に取り組み（写真）。2023年度は、「先生が授業に行きたくないクラスとは」「食堂で並んでいる時間を



を快適に過ごすには」などのテーマで、グループによる探究学習が行われた。その後、12月までに、グループで「本探究」に取り組み、「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現」の過程を2度経験した。2年次は、地域・日本・世界と、多様な視点で、自分の興味・関心に基づいた探究テーマを1年かけて深めていく「グローバル課題探究（2単位）」に個人で取り組む。

3年次は、「知の探究（2単位）」を履修し、それまでの活動を論文にまとめる。その後も各自で探究課題を設定し、卒業まで探究学習に取り組み続ける。



生徒のリアル

仲間を信頼することの 大切さに気づいた

グローバル探究科・3年生
T・Hさん

1年次の探究学習では、グループの中で自分ばかりが意見を出していたため、「もしかすると自分のせいで、みんなが意見を言えなくなっているのではないかと」悩みました。濱崎先生に相談したところ、「もっと仲間を頼ったら？」とアドバイスをもらいました。それがきっかけとなり、仲間を信頼することで、1人ではできなかったこともできるようになりました。自分の考えも変わっていききました。そして、ほかの人が意見を言いやすい環境づくりを意識するようになりました。

忘れてはいけない 大切な失敗を経験した

グローバル探究科・3年生
O・Aさん

1年次の探究学習で、自分たちの探究テーマに関連した内容を、大学の先生にオンラインで質問する機会がありました。グループで何度も話し合って準備をしたのですが、肝心の質問項目がグループ内で共有できていなかったため、聞きたいことが聞けず、大学の先生を困らせてしまいました。私たちにしても思い出すのがつらい失敗になりましたが、今は、自分たちは簡単に忘れてはいけない失敗を経験できたのだと考えるようになりました。

学校概要

設立 1941（昭和16）年
形態 全日制・定時制／普通科、グローバル探究科、ビジネス探究科／共学
生徒数（全日制） 1学年約100人
2022年度卒業生進路実績（全日制） 国公立大は、北見工業大、高知大、琉球大、高知県立大、高知工科大などに22人が合格。私立大は、東洋大、京都女子大などに延べ22人が合格。短大・専門学校進学43人。就職25人。



他者から認められ、失敗を内省につなげる中で、 普通の生徒が「探究する生徒」になる

山田高校は「探究する学校」ですが、入学してくる生徒は、皆ごく普通の高校生です。周りと違う考えを述べたり、率先して行動したりすることで目立ってしまうことを恐れる生徒は少なくありません。教師が「こんなふうにしてみたら？」とアドバイスすれば、生徒は素直にその通りに取り組みますが、それでは探究する力に身につきません。

そんな生徒も、他者とのつながりの中で自分のよさに気づくことで変わっていきます。実際、地域の人からの「よく頑張っているね」といった何気ない言葉がきっかけになって、探究学習に没頭し始める生徒は珍しくありません。

そこで1年次のグループ探究では、生徒同士が互いのよさを認め合えるよう、私が生徒をつなぐハブになることを心がけました。その具体的な方法の1つが、あるグループの生徒たちと取り組んだ交換日記です。生徒と私がやり取りした日記には、今日取り組んだことや、次までにやっておくべきこと、今の自分の気持ちなどとともに、「今日見つけたほかの人のよいところ」を書いてもらいました。日記に書かれていることは原則、その生徒と私だけの秘密ですが、「ほかの人のよいところ」は、私がほかの生徒に共有してよいことになっていました。私は、生徒たちの心をつなぐ思いで、「○○さんが褒めていたよ」と、生徒たちに伝えました。

生徒にとって交換日記は、自分のモヤモヤを整理する場にもなっていました。「リーダーではない自分がグループを引っ張ってよいのだからか」と悩んでいた生徒からは、直接相談も受けました。大人であれば気にもしないような些細な出来事や人間関係などを理由に、生徒の探究学習に対する熱量は日々変化していることを、私は生徒から学びました。

他者とのつながりを通して自分のよさに気づくこともあれば、自信を失ってしまうこともあります。交換日記をしたグループは、大学の先生へのインタビューがうまくいかず、そのショックを長く引きずりました。「いつまでも後悔しても仕方がないよ」と声をかけることも考えましたが、本人たちがまだ失敗を昇華できていないのに、無理に前を向かせるのは違う気がして、「どうしてこうなったんだろうね」と一緒に悩み、ただ見守りました。

結局、その失敗を生徒たちが言葉にして振り返ったのは、1年近く経ってからでした。生徒たちは私にこう言いました。「物事は何でも肯定的に捉えればよいわけではない。落ち込むことも大切だ」「気持ちをすぐに切り替えていたら、反省が深まっていなかった」と。

私は、失敗を受け止めた生徒の成長に感動しましたが、同時に、伴走の難しさも痛感しました。今回の生徒たちは時間をかけて失敗を内省につなげたけれども、あまりに苦しみが大き過ぎると、探究学習そのものから気持ちが離れてしまう生徒もいます。失敗した生徒へのかかわり方は結局、授業や学校行事などを通じて生徒と向き合い、生徒を知ることで見えてこないのかなと、今は考えています。

探究学習の伴走は、初めて自転車に乗る子どもを見守ることに似ています。転ばないと上手にならないけれども、大げさはさせたくない。答えが1つではない問いの連続である人生を生きていく力を、探究学習でどのように育んでいくか、私も試行錯誤を続けます。

探究学習以外の時間での、
生徒とのかかわりを通じて、
あるべき伴走の姿が
見えてくるように思います



はまさき・まい 同校に赴任して4年目。グローバル探究科長。国語科。